

ジオパークによる地域振興と大学の役割 - 茨城大学の場合

Economic development of regional community and role of university-Case of Ibaraki University

天野 一男 [1]

Kazuo Amano[1]

[1] 茨大・理・地球

[1] Environmental Sciences,Ibaraki Univ.

(1) 地方および地方国立大学受難の時代

地方の時代と言われているにもかかわらず、地方が抱えている問題は大きい。若年層の都会への流出による人口減少、財政的逼迫などは地域社会の崩壊をも招きかねない状況となっている。とりわけ、最近のアメリカの金融破綻に端を発した世界的規模の不況により、地方が被る打撃は一層大きなものとなっている。このような中で、地域は活性化をめざして必死の活動を展開している。しかし、ありきたりの方法では地域の活性化は難しく、多くの場合行き詰まっているというのが現状ではないだろうか。

一方、国立大学は2004年に国立大学法人となり、それぞれが特徴を出して自らの生き残りをかけ競争を開始した。その結果、多くの地方大学は経営的に極めて苦しい状態になりつつあるのが現状である。このような状況の中で、地方国立大学が生き残る道は、地域社会に頼りにされ、従来から蓄積してきた知的財産をもとに教育研究を一層充実させて地域に還元していくことである。私立大学も18才人口の減少にともない、経済的には苦しい状態にあり、さまざまな生き残り戦略を考えている。

(2) 産・官・学・民の連携による地域振興 - ジオパーク構想

このような状況の中で、地域振興の方策として有効であり、大学が地域に貢献できる可能性のある事業の一つがジオパークである。ジオパークを実現するためには、地方自治体、観光協会、地域住民などの活発な活動が基本であるが、大学や研究機関が学問的にバックアップすることが必要不可欠である。実りある活動を展開するためには、これらの間の密接な連携が必要となる。茨城大学では、地域と共に歩む学術文化の拠点形成を目指して2004年に設立された茨城大学社会連携事業会と、翌年設置された茨城大学地域連携推進本部が中心となって地域連携活動を開始した。2008年以降、この活動の中心的な課題の一つに「茨城県北ジオパーク構想」をかかげ、具体的な活動を開始した。なお、これは、茨城大学の達成目標の一つにもなっている。現在、「茨城県北ジオパーク」の実現をめざして茨城県を始め県北の市町村によりびかけ検討会を設置した。

(3) 大学の役割

ジオパーク設置において、大学が果たす役割は大きい。特にジオパークの基本であるジオの設定についての学術的な面からバックアップできるのは、大学である。特に各県に少なくとも1つはある国立大学は、その拠点と成りうる。以下に茨城大学の例をあげる。

現在は、シンポジウムや巡検により、茨城県のジオの豊かさや可能なジオサイトについての一般市民への普及を行っている。中でも学生による「地質観光マップ」の作成とそれを使った実験的ジオツアーの実施は、成果を生み出しつつある。特に、各市町村の観光課や教育委員会をはじめ地元企業との連携をとりながら事業を展開していることにより普及の効果が上がっている。ジオパークではジオサイトにおける説明看板などの設備の充実が求められるが、「地質観光マップ」は、ユビキタス技術を駆使して、低コストで自然環境を破壊することなく説明書を作成することが出来る点、極めてすぐれている。

ジオツアーにおいては、それぞれのジオサイトでの説明者（ジオインタープリター）が必要となるが、その育成はかなりの部分を地方国立大学が担うことができる。そのために、一般社会人を対象としてジオインタープリター用カリキュラムを提供することも可能であろう。大学が保有する人的、知的資源を有効に生かす最大の貢献となりうる。このカリキュラムを修了した者に修了証明書を出し、この修了証明書保有者をジオインタープリターとしてジオツアーを実施することができれば、大学がジオパークに大きく貢献できる。